

『BRÜCKE』第30号刊行に寄せて

柿 沼 義 孝

『BRÜCKE』第30号刊行にあたってお祝いを申し上げるとともに、これからのますますの向上と発展を祈ります。

今から10年前、ドイツ語学専攻の定員が満たされていないとのことで、大学院委員としてさまざまな改革を考えていました。

その一つは入試制度の改革でした。当時は春と秋の2回でしたが、これを推薦入試、社会人入試、特別入試を加えて制度を5本立てにしようと提案したのです。その結果は教員と事務関連の仕事が4倍に増えたものの、なかなか志願者は集まらず、その後これらの新制度は廃止となりました。

一方2007年度から導入した「ドイツ語教育」部門は、実績・成果を上げて現在に至っています。当時の日本独文学会教育部会の『ドイツ語教育』（2006年、第11号）では、ドイツ語教育研究会100回例会シンポジウムについて報告しており、ドイツ語教育についての議論の場ができてきたことを示しています。ドイツ語学専攻の施策はまさに時宜を得たものでした。その後も「ドイツ語教育」部門には学生諸君が集まり、これまで優秀なドイツ語教員を輩出しています。

院生諸君には今後もそれぞれの専門領域で切磋琢磨しつつ研究に励んでいただきたいと思います。10年前「編集後記」に書きましたが、物理学者中谷^{なかや}宇吉郎^{うきちろう}の言葉に、「何でも予期せぬ不思議な現象に当たったら、それを逃さぬようにすることが研究の内容を豊富にする一つのコツである」とあるように、いろいろな事柄に関心を持って、皆さんの「不思議」を大切に、それぞれの分

野で研究に勤んで欲しいと願うところです。

(かきぬま よしたか・獨協大学外国語学部ドイツ語学科教授)